

桐鈴凜々

第80号
平成23年11月15日発行
発行責任者
社会福祉法人 桐鈴会
理事長 黒岩 秩子
南魚沼市浦佐 5142-1
電話 025-780-4118
FAX 025-777-3731
e-mail
suzukake@rose.ocn.ne.jp
http://www17.ocn.ne.jp
/~tourei/

二周年記念コンサート 〜たくさんのお客様と嬉しいサプライズ〜

桐鈴会理事長 黒岩 秩子



凜々が八〇号になりました。皆様のご支援のおかげです。一〇月一六日には、桐鈴会二周年を祝って、さわらびでコンサートを開きましたが、会場いっぱいの方々に深く感謝いたしました。

「岸本祐有乃指揮&コンサート」という催しが、一六日(日)感動のうちに終わりました。とにかく、すべてが終了して、岸本祐有乃さん、吹奏楽部の先生三人が感謝の言葉を述べて、終わろうとしても誰も立ち上がり

ません。私までが出て行ってもう一度感謝の言葉を述べたのですが、それでも立ち上がらないのです。みんなが感動に浸っていることがよく伝わってきました。

岸本さんによる皆さんにおなじみの小曲をピアノで演奏、その後、城内、大巻、大和(頭文字をとってJOY)中学の吹奏楽部が岸本さんの指揮で、それぞれ二曲ずつ演奏しました。

帰りがけにみなさん、口ぐちのその感動を伝えてくださいます。涙ながらの方もありました。



サプライズを楽しむ岸本さんと生徒たち、感謝に涙する黒岩秩子

岸本さんの指揮の素晴らしさは、生徒さんたちと顧問の関雅美先生の文に譲ります。岸本さんのピアノ演奏が終わったところで、「今日は、黒岩夫妻の結婚記念日です。皆さんと一緒に祝いましょう」と言い出して、生徒たちを壇上に上げ、私たち二人にも壇上へといって、結婚行進曲!そこへ、かわいらしい花束を二人の生徒が持ってきてくれ、合唱「この広い野原いっぱい」がうたわれているときは、胸にこみあげてくるものがありました。五一回目の結婚記念日をこんな形で祝っていたくことになるとは、

全く予期せぬ「サプライズ」でした。なにしろ、三九二席の会場さわらびは、満杯となって、後ろには立ち見の方が数人。職員たちや、役員みんなでチケットを売りまくった成果でした。五〇〇円というチケットは、「買ってだけおいて」という方がたくさんなので、と心配したのですが、本当に驚きました。

最後には、拍手が鳴りやまず、アンコールということで、「雷神」をもう一回演奏してくれたのですが、二回目となると、断然自信が付いてくるので、見違えるような演奏となるのでした。翌朝起きたら、ポストに、写真数枚とたくさんの方々の写真が収納されているCDが入っていてそこには手紙「岸本さんとのご縁が今後も続きますように」と書かれていました。浦佐在住の関好和さんです。ここに掲載した三枚の写真は関さんが撮影したものです。

三つの中学校の吹奏楽部が二つのチームで出演してくれたのですが、一つの中学の校長からお礼の電話がありました。

岸本 祐有乃 様

感動のコンサートをありがとうございました。生徒たちは、とても気持ち良く演奏させていただきました。

前回、岸本先生に御指導をいただいた折、生徒たちがぐんぐんうまくなっていく姿を直に見ることができ、「こんな機会がまたあればいいのになあ・・・」と思っておりました。ですので、黒岩先生のお声かけには「ヤッター！！」との思いで飛びついた次第です。

ふだん私が同じことを言っても、なかなか生徒たちに伝わらないところを、岸本先生がおっしゃると、すうーっと生徒の心の中に入っていくのです。「プロの先生はすごいなあ！！」と生徒は言っておりましたが、それだけではないということを、今回特に強く感じました。

プロとしての音楽のお力は勿論ですが、やはり何と言っても、先生の音楽に向かう姿勢と情熱、さらに笑顔で優しく、ユーモアも交えながら、生徒たちにたっぷり愛情を注いでくださるお人柄が、生徒の心にしっかりと伝わったのですね。だから何でも吸収して、気持ち良い音楽に繋がったのだと思います。あのコンサートでの音楽の魅力は岸本先生の魅力そのものです。生徒は全員が口をそろえて、「楽しかった！！」と言っています。私も生徒以上に楽しませていただきました。そして勉強させていただきました。

基本は「笑顔」ですね。先生の笑顔に負けないよう、授業でも部活動でも、笑顔を意識するようになりました。「またお会いできる日が来ますように！」と、音楽の神様に祈っております。ほんとうにありがとうございました。

城内中学校吹奏楽部顧問 関 雅 美



ピアノ演奏の合間に岸本さんの楽しいトーク



一二周年記念コンサート
「城内中メッセージ」
コンサートの後、城内中吹奏楽部のみなさんが岸本さんにお手紙を書いて下さいました。抜粋してメッセージを掲載します。

「生徒も先生もとっても貴重なチャンスをいただけて、とても喜んでいました。私も見に行っていたのですが、本当に素晴らしい指揮でしたね」。岸本さんも「若さって素晴らしいですね。あんなに受け止めてくれて本当に感激！」とのことでした。またぜひ今度は、もっとたくさんの中學生に広げていきたいと思

っています。
城内中学の関雅美先生が、大和中、大巻中を誘ってコーディネイトしてくださったのですが、今年度で定年だということがあり、二月一九日(日)午後には、その送別演奏会をしようとして、岸本さんと企んでいます。また詳細はご案内させていただきますね。

★岸本先生の指導はすごく楽しかったし、自分たちの演奏がどんどんきれいになっていくのを聞いて、岸本先生はやっぱすごい指揮者だなあと実感しました。

★ひとつひとつの音に心を込めて演奏して、と言われたのをすごく覚えていきます。これからは、私も、それを心がけていきたいです。

★音楽はお客さんに伝えることがとても大切なことだと思います。何も思わないで吹いてもお客さんには何も伝わりません。気持ちをお客さんに伝わりませんと、お客さんにも伝わると分かりました。あと、みんなと合わせることはとても大切なことだと思います。一人で吹いても合奏にはなりません。隣の人や同じパートの人と合わせながら吹くことはこれからも意識していきたいです。

★私が初めてお会いしたときの第一印象はとても「元気」のある方だと思っておりました。そし

で、なぜそんなに「元気」を持っているのか不思議に感じました。ですが今回のコンサートで分かりました。岸本先生は、お客さんから元気と期待をもらい、それにこたえているのだと吹いていて思いました。私たちは岸本先生に音楽を、自分たちで作り上げる楽しさを、教えていただきました。このことは一生忘れません。そして、またいつか機会があったら岸本先生の指揮でクラリネットを吹かせて下さい。

★私はトランペットを吹いていて、とにかく大きな音を出せば良いと思っていました。ですが、岸本先生に指導してもらい、「お客さんにパワーをあたえて、またお客さんにパワーをもらえる」という言葉から、これからは、聞いている人のことも考えて自分の出せる一番良い音を出そうと思いました。

★「君に届け」のドラマで大きくすると細かく教えてくれてすぐく分かりやすかったです。今自分やりやすかったです。今は自分

でもうちよつとクレッシェンドをかけてみようとか、いろいろ工夫してやっています。



指揮をする岸本さんと、それに呼応する大和中学吹奏楽部生徒

★岸本先生の指導のおかげでどんどん演奏がきれいになっていくのをすごいなと感じています。みんなの心が一つになり、素晴らしい演奏をできたことに感謝しています。お客さんも感動してくれました。コンサートは大成功だと思います。たくさんの方がいて、足がガクガクするほどきんちようしたけれど、演奏を楽しむことができて、本

当に嬉しく思います。

★上手にできたらほめてくださって、とてもうれしかったです。だから、みんなの演奏が上手になって、まとまっていたのだと思います。

★岸本先生は、とても明るく、優しく、とても音楽を楽しく！という感じでした。いつもの指導とちがいで、その国のことについてのお話や、記号、音ぶからのイメージのふくらませ方などをお話しして下さったので、どのようにふくかをイメージしやすかったです。

★岸本先生が「和音を感じてネ。」とおっしゃっていて「なるほど♡」と思いました。今は、普通の部活でも感じるように努力しています！岸本先生の「音楽を楽しもう♪」という姿勢にスゴク憧れました！今回のコンサート、とーっても楽しかったです。日本人は強弱が弱いというところで、そういうのを気を付けていきたいと思えます。

ひまわり近況

刺身をつまみに誕生会



オープンから約七ヶ月が経過しました。男三人の生活はいかばかりか？と不安もありましたが、昔の下宿さながらで、和気あいあいと毎日が過ぎていきます。

九月三〇日は安部（あんべ）さん六二歳の誕生日でした。安部さんの希望で刺身をつまみにビールでお祝いです。毎晩の晩酌とは違い、格別の晩酌で、和やかな誕生会となりました。

（星野 淳子）



ビールが旨い！（左が安部さん）

桐の花家族会開催

グループホーム桐の花

管理者 中村文字

桐の花入居者九名の家族に声をかけ、一名欠席、ご夫婦で出席された方が一組、一〇月一日に夢草堂で職員を含め十五名で家族会を開いた。初めに星野から桐の花の現状、入居者の方々の状況報告、デイサービス、ショートステイ（入院時空きベッド活用）の説明が行われた。そして看取りの話へ。開所当時から入居の方が二名となった。平成一六年一月に開所後この八月一八日で、一〇人と一匹の御看取りを経験させていただいた。

八月一八日の御看取りは森澤タケ様。一〇二歳の愛らしいおちやめなおばあちゃん。思い出しただけでも癒される方。この方の最後の御看取りは素晴らしい体験だった。その時の状況と今までの経験を基に、家族の

協力なしでは看取りは難しい事を話し、それぞれの家族の想いを聴かせていただいた。その内容を紹介しようと思う。



食事会の様子。片桐アキコさん御一家

◆Hさんの御家族

今までは嘆きの人生だった。感謝の言葉など聞いたことがなかった。しかし今はねぎらいの言葉と感謝の言葉が聞かれるようになった。本当に嬉しい。今後何かあったら協力し、関わらせて欲しいと思っている。

◆Kさんの御家族

病院に入院時一時はもうだめかと思った。しかし病院側と桐

の花と相談し桐の花に戻ることででき、本当に元気になり嬉しく思っている。

◆Tさん御家族

今元気だからあまり気にしていなかったが、話を聞いて今後兄弟達とどう看取りたいか：考え、相談したいと思った。

など、皆さん話をしてくださったあと桐の花から、最後の送りに着せたい服、着物を用意していただけたら嬉しいとお願いした。皆最後の終わり方は違いうだろう。しかし次の旅立ちはめいっばい感謝の気持ちを込めて家族と共に送りたい。それが桐の花の看取りでありたい。そう願う、家族会を終了した。

その後食事会。職員が腕を振るった醤油赤飯と吸い物。ゴマ豆腐がおいしい須田屋さんの仕出し。「ごっつお」である。

いつ旅立ちがきいても悔いがあるべく少ないように。笑顔で過ごせますように。他人事ではないですよ。一日を大切に過ごしましょうね。



浦佐小学校 六年生、 やってきた！



一〇月二〇日、浦佐小学校の六年生四五人が桐鈴会に職場体験ということでやってきました。三〇人は鈴懸に、一五人が桐の花にと分かれて訪問。私は、鈴懸に来た生徒さんに説明をしながら案内をしました。一階から階段を上って二階に出ると床の色が変わったことを発見します。そして、お部屋への入り口のドアが、この畑に立っていた桐の木で作られたことを知ります。鈴木さんが寄付してくださった畑とその桐の木にちなんで「桐鈴会」ということも知ります。二階には、必要な方のお世話をするヘルパーのたまり場もあるし、ゲストルームもある。でも今は、この「ゲストルーム」に鈴木要吉さんが入っていて、「ゲストルーム」は、鈴木さんが本来はいることになっていました。隣に移動しています。理由は簡単。隣に立っている鈴木さんの家から見える景色と「ゲスト

トルーム」から見える景色が同じなので、鈴木さんが「ここは自分の家と同じ」と言われたので、交換しただけなのです。

五階まで登って展望風呂を見た後、一人の男の子が聞きました。「これはだれが作ったものですか？」と壁に貼ってある献立表を指して。「この栄養士が作ったものなのよ。カラフルできれいでしょ？」「ここにある『セレクトメニュー』ってなんですか？」「まあ！ありがたい。素晴らしい質問だね。実はね、ここには投書箱があつて毎日の食事について、入居者の皆さんから色々なご意見が寄せられるの。それを見て栄養士さんは、なるべく大勢の方の希望がかなえられるようにって、頭を絞るの。それで出てきたのが、この『セレクトメニュー』。二種類の料理のうち、好きなほうを選べるというわけなの」

桐の花のほうでは、職員たちに具体的な仕事のことを質問攻めにしていました。子どもたちには何が記憶されていくのでしょうか？

(黒岩 秩子)

浦佐認定こども園 お出掛け遠足

三歳児担当 中島 育子



☆歩いて二分ぐらいのところに、この四月にオープンした「浦佐認定こども園」。医療法人萌気会（黒岩卓夫理事長）が受託し、公設民営です。「ご近所」としていろいろなつきあがあるもので、皆さんに紹介します。前号の凛々で「こども園」を知って、沖縄からの議員団が十一月一六日に視察にきます。



一〇月二七日、爽やかに晴れ渡った秋の日、こども園の幼児クラスはお出掛け遠足に行きました。自分達で行きたい場所を出し合い、十日町情報館・月岡公園・響きの森・さくり温泉・サイクリングターミナルの五コースに絞り込みました。その中から自分の行きたいコースを選び、五歳児がリーダーとなり、持ち物から出発時間・何をしたらか（目的）など話し合い、子ども達で計画を立てました。そして、各チームとも、試練が待っているのです。

サイクリングターミナルを選んだのは、三歳児四名・四歳児二名・五歳児七名の計六三名でした。スキー場の山に全員が登ってこども園を見る、昼食に五〇〇円を払ってレストランでお子様ランチを食べるのが目的です。当日はリーダーから「がんばって山に登ること・勝手な行動をしないこと」などが話され、山登りの出発です。最初はどの子も意気揚々と登って行きましたが、山頂前の急な山道に差し掛かった時、三歳児の何人かが山頂を目の前にして「もう

登れない。」と、半べそをかき始め、立ち往生。三歳児担任は手を引いたり激励の言葉をかけたったり、どうにか登らせようと必死です。それを見た五歳児七名が山頂から降りてきて「がんばれ！」「もうちょっとだよ。」と手を繋いで山頂まで登らせてくれます。最初に登頂した子からかなり遅れてやっと全員が登頂し、全員で浦佐の町を一望しました。残念ながらこども園は八色の森公園の影に隠れて見えませんが、目的を達成したこども達の心の中にはくつきりと思えていたことと思います。他のチームでも電車に乗るお金が足りなくなったり、昼食代が足りなかったりとアクシデントが発生したようですが、各チームとも五歳児が中心となり、自分達で考え体験し、力を合わせてそれぞれの目的を達成して無事に帰ってくることでできました。このお出掛け遠足での体験が、こども達にとって楽しい思い出になるとともに、成長していくためのエッセンスとなってくれればと思います。



今回は
「林 ハナさん」
です。



桐の花ができた時から住んでいるハナさん。今年九三歳になりました。「うちは医者。動物の医者」「長男は東京消防庁に勤めているの」がお気に入りセリフです。「父は馬に乗ってここらまで往診に来たんだった」。車で四〇分ぐらいかかる塩沢の長崎に住んでいました。

「生まれて三日後に里子に出されてね、双子だったから。春に生まれたからハナ、ハルってつけられてね。いだよし（枝吉をこちらではこういう）のときくべいという家で育てられたの。かわいがってもらってね。三つの時に実家に戻ったの。母が言うには、やっぱり自分で育てた

子のほうが可愛いんだって。だから、何かあると『ハル、これあげる』というし、なんでも、ハル、ハルだった。学校に行くようになったら、私は、なんでも優等生、ハルはそうでもなかったから、母には面白くなかったのかも。走るのも早いの、体も丈夫だったし、ハルはそうでもなかったからね」

「私のうちは、上に七人の兄がいたの。最後に双子が生まれてね」

実は、この双子さん、年をとっても良く似ていました。ハルさんは、塩沢に住んでいて、萌気園の二日町診療所にあるショートステイをよく利用されていました。卓夫がそこで、ハルさんを見つけて「ハナさん、どうしてここにいますの！」と言ったというのです。そのぐらいこの二人は似ていた。このことが分かった桐の花の職員たちは、すぐにこの二人を会わせてあげたいということで、ハナさんを



左が「ハナ」さん、右が双子の姉の「ハル」さん。
二日町の「沙羅の花」へ「ハル」さんに会いに行った時の一コマ。

二日町にお連れして、しばらくぶりの二人の対面を実現したのでした。涙涙の再会だったということですよ。

「ハルのほうが弱くて先に死んじゃって、泣きました」実は、このインタビューの始まり

に私がハルさんのことを「亡くなって残念だったわね」と言ったら「いえ、生きていますよ」と言っていたハナさん、亡くなったことを思い出してくれました。亡くなった時、なんとハナさんの夢枕でにできたのです。

「ハルが・・・」というハナさんの言葉で、職員が電話したら、ちようど告別式が始まるどころ。長男のお連れ合いさんと話し合い、最後のお別れなのだからぜひとお願いして、急ぎよ迎えに来ていただきました。おかげで野辺送りに間に合って、火葬場でお別れすることができたのでした。双子の間で通じ合うものって、すごいものですね。

「小さいときに、母が何でもハルにばかり与えることを、私はずいぶん悩みましたよ。よくよく考えて、母は自分で小さい時から育てた子のほうが可愛いのだ、とわたしなりに理解したということ。自分ながら偉かったと思う。周りの人たちは『なんだハナばかりが良くなるんだ』とか言っていた。私がつかったことはわからなかったのでしょうね。」

（これは、ハナさんにとっての「真実」であって、かなりの「物語」だということですよ。）



スウェーデン七人旅 (その①)

黒岩 扶子

2011. 9. 24~10. 2

・ストックホルム

・イエテボリ



一〇月二日無事スウェーデンから戻ってきました。九月二三日、出るときに卓夫が浦佐駅まで送ってくれて言うことには「今生の別れとなるかもしれないから」それと危ないことが多かったように思います。朝早く暗いうちに散歩して、最後にホテルに着く直前、寒くて両手をポケットに突っこんだままつまづいて転倒し、左のひざは、ズボンが破れ、右ひじは、皮がむけて血が出ました。

それから、夜中に下痢で目覚め、なんと、ももひき、パジャマにまで染み出て大量の洗濯。ベッドが汚れなかったことが救いでした。

胃腸がやられたのは、私だけではなく、あとの二人も、日が違うのですが、嘔吐しています。食べ物の違いか、それとも単なる食はずきか？

・八年前にも七人旅

八年前には、年賀状で呼びかけて、「スウェーデンの知的障がい者の生活を見学します」それにこたえて、全国から七人がチームとなって、見学に出たのでした。

今回もまた七人のチームで、八年前に行った人が六人と、新しく仲間になった方一人とで、またしても七人のチームでした。以前もスウェーデン在住の日本人ハンソン友子さんが、こちらの要望を聞いて向こうの施設と交渉をして、見学場所を確保してくださったのですが、今回もまた同じハンソン友子さんが、コーディネートしてくださいました。友子さんのお住まいが、イエテボリ(人口五〇万、



「ストレートロード」という昔巨大な障がい者施設だったところ。9月なのに紅葉していた。

スウェーデン第二の都市で、西海岸に面しており、ボルボの本社や工場があるところ(です)であるために、イエテボリのホテルに五泊して、その近辺を四日にわたって見学するというコースです。

第一日目に行ったところは、昔ストレートロードというものすごく大きな知的障がい者のコロニーのようなものがあつたところでした。八年前にも来たところがある見覚えのある建物たちでした。ここは、イエテボリのホテルから車で三〇分ぐらいのところですが、ムーンダール市という人口五万の市でイエテボリ市の隣です。施設解体が叫ばれて、二〇〇〇年ぐらいには、ほとんど解体が終わっていたのですが、建物はそのまま残っていて、今は、精神障がい者の家になっていたり、今回私たちが見学したところは、特別な学校になっていたりしました。特別というのは、普通の中学校の中に特殊学級があつて、さらに教室から抜け出してリラックスするという場所があるのです。

・市役所の部長さんの説明

まず始めに、ムーンダール市役所の児童と青少年行政部企画部長、の女性(インゲマリ・スヴェエジェネース)から、市の児童に関する様々な報告があり、そのあと

で、この学校の校長(ソルヴェイグ・ストロムボーン)が登場。「日本人が来てくれたのは初めて」とのこと、上がってしまったらしく、OH機器で写真を裏返しに置いたりするほどでした。それもとても感じが良かったのですが、話の内容には驚かされました。校長というのは、先生から上がっていくのではなく、会社の社長と同じように公募されるらしいのです。この校長は、一〇年前にここができたとき赴任してきたのですが、二〇〇名の健常児と三〇名の障がい児がいて、障がい児の中にアスベルガーの子がいると聞いたときから、そういう子が休める別の場所が必要だ、と思ったのだそうです。それで、寝るところ、食べる場所、料理するところが揃っている「スタジオ」という場所を作りました。ここには、一〇名ぐらいの子どもが登録していて、そういう子たちは、いつでも授業中黙って抜け出して、この部屋に來ます。登録していない子でも、授業中だったら先生に言ってもやってくるのだそうです。日本で言う「保健室」みたいなところですね。

(つづく)

入居者コラム

のど自慢チャレンジ記

ケアハウス鈴懸 阿部 房江



友人と、何ごとも経験だから近くにNHKのど自漫が来たら出ようと相談がまとまった。

何年くらい前になるでしょうか。湯沢町にのど自漫が来ると聞いて早速申し込んだのですが、私だけが予選出場が決まったのでした。

当日の朝は早起きをして、タクシーに乗り湯沢に向かった。運転手さんにこんなに早く何があるんだね?と聞かれ、

「のど自漫に出場するんです」

「ほうー。今日は本番かね?」

「予選なんです。初めてなんですドキドキです」

「何でもやれる時にやっていた方がいい。まあ頑張らっしゃい」

会場の広場はたくさんの方が集まっけていて圧倒された。夏の強い日差しの中でしばらく待った。和服姿の人や、声出しをして喉のコンディションを整えている人もいた。受付で一〇二番をつけて入場。説明によると、申し込み者は六〇〇名以上で、予選出場は二〇〇名と聞いてびっくりした。一人の持ち時間はわずか五〇秒。この短い時間に個性をアピールしようと、皆真剣そのものでした。

「一〇二番!」

どきっとして立ち上がった。マイクを渡され、ステージの前に出た。ステージは明るく、場内は照明を落としてあった。カメラ二台が向けられた。予選出場者が前方に二〇〇名。後方に聞きに来た人たちや予選落ちした人たちで、およそ二〇〇名はいたような気がした。

前奏が始まった。何とか持ち時間を歌った。しかし、本番二〇名のなかには残念ながら残れなかった。

予選風景もテレビ放映があったので、たまたま鈴懸の入居者がテレビを見て、「あつ、ショートステイに来た人だ」と言っていたそうです(当時はまだ待機者

で、時々ショートステイを使っていた)。それを聞いた職員が「今度阿部さんのど自漫に出るときはバックで踊りますからね」。

それから数年後、六日町にのど自漫が来るといふ情報を得て、チャンスと早速バックで踊る職員を含め申し込んだのですが、書類段階で二〇〇名の予選に残る事が出来ず残念でした。職員の小林さんから当日の入場券を二枚いただき、上村さんと二人で初めてのど自漫風景を会場で見ることが出来て楽しかった。

歌うことは健康にもよく、ストレス解消にもなるし、とにかく歌は楽しい。

これからもどんな小さなことでも良いから、チャレンジする気持ちを持ち続けたいと思っています。

編集後記



一年が経つのも早く、もう年末です。昔から卯年は災害の年だと聞きましたが、今年はニューヨークの地震を始めに、三月の東日本大震災、新潟・福島集中豪雨や台風など日本ばかりでなく世界中が甚大な災害に見舞われました。過去これほどの災害が重なったことがあったでしょうか? 厳しく悲しいことがたくさん起きりましたが、来年はみんなが安心して過ごせる年になつてほしいです。

先日、友人と出掛けた先で、私の子どもの同級生がウエイトレスのバイトをしていました。この春に高校生になったばかりと思つていたのに、学生服姿と違つたせいかな? ! すごく大人っぽくて驚きました。自分もそれだけ歳を取っているんだと実感あれもこれもやらなければと思いつつ仕事は進まず、これも歳のせいなのか? と、こんなことを思い、過ごせる自分は幸せだなあと感じていきます。

(関 和香子)